

## 美しい死のために

— 佐江衆一『黄落』を検討素材として —

### 一 はじめに

佐江衆一の『黄落』において、語り手の「私」（佐藤トモアキ）の母キヌは、米寿を前に転倒して大腿骨を骨折し、手術後懸命にリハビリに励んだ。にもかかわらず、やがてマダラボケを発症し、つづいて失禁や夢遊病がはじまる。夜には夫の首を絞めるようなこともおきる。このため夜の身体拘束も必要になる。この段階で彼女は自ら食を断ち、自死を選んだ。作品中ではこれを美しい死とし、語り手も「老いの死に方」を教えられたとしている。しかし、上野千鶴子はこの点を捉えて「これは平成のおりんばあさんだ、という思いを抑えることができない」とした<sup>（注）</sup>。自身が無用の存在となつたとき、みずから死を選ぶ姿が周囲の協力すら得て美化されている点が、深沢七郎の『榎山節考』のおりに共通していると上野は言うのである。キヌの死は、はたして語り手が言うように「老いの死に方」として、人が求めるような美しい死なのであるか。

この物語の背景には、「老親老後」の問題が取り上げられている。

木村 東吉

「老親老後」とは、自身がそろそろ還暦を迎えて老境にさしかかった段階で、老いた親の介護に心身を消耗し尽くし、その負担の重さから家庭崩壊の危機にも直面する状態をいう。この問題が社会的に拡がる深刻な現状を踏まえたものであるために、作品は発表以来話題作とされてきた。本稿では、望ましい終末介護のあり方を求めるべく、これらの問題に検討を加えてみたい。

### 二 哀れな尊厳死

上野が指摘した『榎山節考』の村は山奥にあつて孤立し、食料が極端に不足している。村では長寿を忌むので、おりんは自分の丈夫な歯を恥じ、石臼に打ちつけて折るようなこともする。曾孫を見ることさえ恥とするため、通常は還暦を迎えてからする棄老の「お山参り」を、おりんはあえて急いでいる。「お山参り」は一連の儀式につづいて息子に背負われてするのだが、「お山参り」をした時雪が降ると「運がいい」とされる設定になっていて、おりんが榎山の頂上に着いた時、いみじくも雪が降りだす。このため息子の辰平は、

後ろを見てはならぬという「お山参り」の掟を破って引き返し、「おつかあ、雪が降って運がいいなあ」と声をかける。これに対して、その直後には、「お山参り」を拒んだ錢屋の又やんが、倅に雁字搦めに縛りあげられて「地獄の谷」に蹴落とされていゝのを目撃する。この時は鳥の大群が谷から舞い上がっている。二つの場面は対比的に書かれているわけである。

『黄落』では、キヌがみずから食を断った時、その意志を汲んで医師も栄養剤の処方控えている。このキヌの死について、献身的に介護した語り手の妻藤子が「おばあちやまはわかつてくれてるわ……火傷もすっかり治して、あんなにきれいな軀にして送ってあげたのですもの……お義姉さんが看病してまたつくってしまった床擦れも、私が最後に治してあげて、湯灌だって私一人ですて、お人形さんみたいなおばあちやまにしてあげたのですもの……」と述べており、語り手もこの自死を「老いの死に方まで教えてくれた」と受けとめている。この場合も、介護者に対する感謝も知らず、老人の甘えを限度いっぱい追求して生に執着する父を「老怪さん」と呼んで対比している。自死を選んだ老婆が賛美され、生に執着する老爺が醜いものとして描かれているわけである。

上野はこのように「美化された母親の死に、わたしは落ちつかない気持ちで周囲の白髪頭を見回さないでいられない。たとえこの老母のエピソードが実話であったとしても、そしてそのことにどんな厳粛な気持ちを抱き、母親への敬愛を深めたとしても、それをこのように描くことで原作者はひそかに、(中略)潔癖な(自死へのすすめ)を高齢者に説くことにならないだろうか」としている。表面的には手厚い介護の陰に、棄老に通じる精神があることを鋭く指摘したものである。おりんの背後には、村の存立にかかわる食料問題があった。キヌの場合は、これが家族の介護負担の問題に入れ替わっただけだというのであろう。村の掟としての年齢の問題から個人

の自立能力の問題へという変化があるとしても、二人の老婆の自死の選択には、明確な共通点がある。いずれも周囲の期待に自分から順応し、これを誇りとして自己を犠牲にしているからである。

ただし、『黄落』におけるキヌの自死には、それがマダラボケを発症した後のことであることもあって、尊厳死の様相があることも見落としてはなるまい。「築地の新宅のお姫様」として育った彼女と「質屋の番頭」だった定吉との結婚は、継母への遠慮から承諾せざるを得なかったもので、キヌにとつて不本意なものであった。また、夫には不実を疑われる過去もあつたらしい。しかし、だからといって、七〇年以上をともに暮らした夫を夢遊病のなかで絞殺するかもしれない自分(これは自覚していないかもしれない)、あるいはそうした事故を避けるためとはいえ、夜は睡眠薬を飲まされ、寝ている間に息子に腕をベッドに縛られるようになった自分を許容できなかつたのではないか。彼女が骨折して初めて入院した日の夜、「盥回しにするのか」とか「ベッドに縛りつけるのか」と騒いだとされている。これは胸奥のおそれの表明だったに違いない。彼女の自尊心を最も傷つけるものが何だったかを示している。彼女が人一倍リハビリに熱心だったのも、老い先の悲惨な生を回避しようとする必死の努力だったに違いない。子どもがいなかったら離婚していたという不本意な結婚生活の後、さらに悲惨な生が展開する予感に恐怖を感じ、これを受容できないために自死を選んだ可能性は高い。彼女の正常時の思考には、高い自尊心が維持されている(註二)。

高齢者が痴呆の進行とともに幼児に返るのは一般に見られる症状の一つである。しかし、キヌの「幼児返り」は、子どもの赤ちゃん返りとは様相が違う。彼女の場合は、痴呆の発症とともに、夫を「シッシ」と犬のように追い払うようになっていゝなど、七〇年を超える結婚生活を否定し、娘時代への回帰を強く指向したものになっている。この点に注目すると、不本意だった結婚の否定と将来への不

安から、これらを自分の人生から排除したい願望の現れであって、願望と現実の区別がつかなくなっている形である。キヌの場合は、周囲から死を迫られているのではなく、死が近い将来に不可避のものとして迫っているのである。『檜山節考』のおりんの場合は、彼女がいかに健康で有能であったとしても、もし「お山参り」を拒否すれば、村の掟として銭屋の又やんと同様の運命がまっていた。彼女には誇りある「お山参り」を取るか、汚辱の死を取るかの選択のみがあつて、生きる道は残されていなかった。キヌの場合は、この点が根本的に異なっている。キヌの自死が多くの読者に受容されている理由は、彼女の自死にこうした尊厳死の性格があるからであろう。少なくともここでは彼女の最後の自発的な選択が尊重されている。その意味でも、救命装置に繋がれた単なる延命よりは人間的である。この点は語り手の主張を理解できる。

しかし、だからといって、これをもって「老いの死に方」のモデルとされるには、キヌの人生があまりにも虚しい。例えば湯本香樹実の作品には、個性的に生きる老人が子どもの視点から描かれていて、彼女の文学の特色の一つとなっている。『ポプラの秋』もその中の一つである。この作品では、語り手の星野千秋の母方の祖母が端役として登場する。祖母は車いすの生活をしているため、介護を受けている息子や嫁の前では幼児のような「かわいらしいおばあちゃん」を演じている。けれども、久しぶりに訪ねてきた娘（千秋の母）や孫娘（千秋）と散歩にでると、突然「あなたの猫撫で声きいていると、せつかくの寿命が縮んじゃう」として、「それ、やめてちょうだい」と言い、「かわいらしいおばあちゃん」の仮面を脱ぎ捨てる。そして夫が自殺したので未亡人スタイルをしている千秋の母に自分の金と指輪を渡し、「あとで『ああ、あの時はまだ若かったのに』なんて後悔しないようにしなさいよ」と忠告する。彼女はこの演技の理由について、「思い切り顔をしかめ」ながら、息子が

「こちんこちんの堅物」だから「あたしは年寄りやるしかないのよ。年寄りらしくしてなくちゃ、うまくいかないのよ」と言っている。

こうした例を取り上げるのは他でもない。『黄落』におけるキヌも大同小異の立場に置かれているからである。例えば露子はキヌを「おばあちゃま」と呼んでいる。通常の家庭的習慣かもしれないが、幼い孫からの呼称を、孫が成人した後も主婦だけが使用している点が注目される。これに対して、痴呆が発症してからのキヌは火傷の治療に際して、露子を露子先生と呼ぶようになっていく。語り手はこれをお医者さんごつこと解釈している。しかし、これは痴呆の進行とともにキヌを幼児扱いする露子に対するキヌの対応である。呼称は人間関係を反映する。自分が幼児として扱われるので、相手を先生として待遇しているのである。このようにみると、キヌが絶食を始めた後、露子に「わたし、お芝居が上手でしょ？」と言っているのは、患者から医者への言葉ではないし、単に食べなかつた食事に「ごちそうさま」と挨拶していることだけを指しているのではない。このキヌの「お芝居」が『ポプラの秋』における星野千秋の祖母の演技の延長線上のものであることは、容易に理解されよう。お仕着せの「おばあちゃま」を健気に演じる優等生の悲哀がにじんだ言葉である。この点については、露子も語り手も気づいていない。介護する側の盲点である。この限りなく寂しい演技を選ばせていることは、自立能力を失った老人が、家庭内で自然体で生きることがいかに困難であるかを示したものである。多くの老人が独居を選ぶ積極的根拠の一つが、おそらくここにある。キヌの選択をもって「老いの死に方」のモデルとされたのでは、老人の人間性解放は期待できない。

とは言っても、一般的にはまだ、キヌの生き方が周囲からは受け入れやすいらしい。そのためか、キヌとは逆に、湯本香樹実が描く個性的な老人はいずれも縁者との交渉が稀薄な独居老人で、孤老死

を選ぶ。縁者たちはそうした老人を「勝手な生き方をした人」として比較的冷淡に待遇している。にもかかわらず、湯本が描く孤老死は、決して惨めでない。『ポプラの秋』において話題の中心になる老婆は、「子供にとつては充分すぎるほど不気味」な存在で、容貌は「下顎がしゃくれたように突き出た」「極端なちんくしゃ顔」で、「あやしい菓を飲んで悪者になってしまったポパイ」であった。その彼女が、「死者への手紙」を預かるという奇妙な仕事をしている。老婆の前半生は自身によつて様々に語られるのでよくわからないのだが、千秋が聞いた話では、初めて愛した男性に死なれると、その後現れた漢文の大学教授（初恋の人にそっくりであったという）と駆け落ちし、その夫にも死なれた後はアパートの大家として生計を立てている。彼女の日常生活は汁粉や豆大福を食べ、蕪の味噌汁をすすり以外に楽しみをもっていたようにはみえない。にもかかわらず、セーターが十枚は入るタンスの引き出しに一杯の手紙を預かり、九十八歳の長寿を全うし、「朝、声をかけてみたら返事がなくて、お布団のなかで眠ってるうちに、だったみたい」という形で死ぬと、アパートの住人や手紙を預けた人々によつて盛大でさわやかな葬儀が営まれている。

千秋が死んだ父への手紙を書くことで神経症から立ち直ったように、かけがえのない人を失って悩む多くの人々が、子どもばかりでなく大人まで、虚構と知りつつこの老婆に託すことにして死者への手紙を書くことで癒されていたからである。

この老婆の場合、表面的には孤独な老後であり、最後まで孤老死であった。最晩年の詳細は書かれていないが、最後まで自立して身ぎれいだったことになっている。死者への手紙を預かるという仕事とともに、こうした点に幾分ファンタジックな構成がみえる。こうしたところに作品と時代状況との乖離が反映しているともいえるが、少なくともこの老婆の生き方には充実した老後がある。家族に依存

して「かわいらしいおばあちゃん」の仮面を生きなければならなかった千秋の祖母や、痴呆が始まると七〇年の結婚生活を否定し子どもに返つて自死したキヌに比べるなら、その差は歴然としている。

このように比較してみると、キヌの自死に尊厳死の側面があったとしても、介護者からはそれが賛美されたとしても、彼女の人生は結局我慢の権化ともいえるべきものであったことになる。そうだとしたら、独居老人Ⅱ孤老死Ⅱ不幸で、家族に囲まれた老後Ⅱ手厚い介護Ⅱ幸福といった定式的考え方が常に正しいわけではない。自他に受容された死は一見安らかで美しく見える。しかし、キヌの場合は、周囲にとつて都合がよいから賛美されるのであって、これが本人にとつてもつとも望ましい死であつたとは限らない。その生涯が充実感を伴っていないなら、表面的には美しくとも、哀れさを払拭することができない。これを大町公がいうように、山折哲雄の紹介する宗教的自死と安易に比較することはできない<sup>(註三)</sup>。

### 三 介護負担の軽減のために

このようなキヌを老後のモデルとする『黄落』の語り手やその妻には、老後に豊かな夢を描けない。にもかかわらず、彼らがあえてキヌの死をモデルと考えるのは、彼らが老親介護に疲れ果てているからである。キヌの死後も、彼らには更に語り手の父定吉の介護が残されていた。定吉は息子に「老怪さん」と呼ばれながら、老人の甘えを限度いっぱい追求して生に執着している。その介護に疲れ果てた夫婦は、作品の末尾で、次のような会話をしている。

「子供たちには、俺たちのような苦勞はさせたくないな」

「ええ、絶対させないわ」

「あまり、長生きしないことだね」

「最後はおばあちやまのようにすればいいのよ」

「最後の二、三週間だけのことを、いまから子供たちに頼んでおくか。病院ではああはいかないからね」

「子供たちには、俺たちのような苦労はさせたくない」という願いは、親の介護に苦しんでいる者、苦しんだ経験をもつ者、あるいはそれを身近に見たことがある者に共感を得るであろう。だから自立できなくなるまで「あまり、長生き」したくないという心情も理解できる。困難で長く、具体的な成果を得るものが無いと思われがちな終末介護への思いが、ここにはある。

しかし、だからといって、人生の終末の形は本人の望むようには選べない。自身の痴呆を自覚し、死期を予感したとき、キヌのように自死を選べばよいと、人は願うだろうか。また、そのような決意を老いた親の心底にみる子の世代は、そこに寒々としたものを感じないだろうか。むしろ寒々とした現実を感じながら、介護を引き受けることの耐え難さから、配偶者への遠慮から、あえて目をつむり、つむることで自らの心に荒廃を感じているのではあるまいか。こうした問題は、現代社会の広い層に影を落していると思われる。こうした状況を救うことはできないか、少し検討してみたい。

『黄落』において語り手と落子の精神的疲れの大きな要因になっているものに、定吉の人格欠損がある。定吉には介護者に対する素直な感謝の念も無く、それを表明する方法も知らない。自立するだけの気概は無いので息子の庇護に頼りながら、その庇護に隠れて落子に淫らなちよっかいを出したり、「舅」の立場から「嫁」をいびったりしている。このために落子に嫌われ、落子と語り手の精神的疲労感を増幅している。

これに対して、落子は腰痛に耐えてキヌの介護を一人でやり抜きながらキヌを嫌っていない。善意に基づく労苦が、心からの感謝に

よって報われていたからである。つまり、介護に伴う精神的疲労は、介護を受ける側との人間関係によって、大きく作用されている。

定吉の人格欠損が痴呆に伴う症状であるなら、それとして理解するとともに、精神科医その他の専門家の援助や助言を受けることで家族の精神的負担はだいぶ改善されるのではないか。肉親には耐え難いことも、介護職等の専門家には通常のこととして対処されることが多くある。

定吉は、施設に預けられたとき、おきまりの不満を漏らしているが、結局すんなりと順応している。こうした点を考慮すれば、彼の外面そとづらの良さを生かして、介護を専門家や施設にゆだね、そこで彼うらづらの充実した生き方が選ばれてもよかつたはずである。内面がわるく、家庭で「嫁」いびりをし、介護負担を増幅してしまう人物に、なお家族介護を期待した語り手には、家族介護を第一と決め込む思考の硬直がある。

キヌの場合は、施設介護を「盥回し」と受けとめる可能性が強い。したがって、彼女が表面的には施設に順応しているようにみえても、専門家の介護によって心が満たされることはないであろう。彼女にこそ家族介護が必要であった。

このように分析してみると、キヌに夢遊病の症状が現れたとき、定吉の介護の重点を施設介護に移していたら、あるいはキヌの手を縛ることも避けられたのではないか。キヌは定吉を嫌っており、定吉にもキヌの痴呆に愛情ある気遣いを見せていない。彼らを一時的に引き離すことになったとしても、問題はなかつたのではないか。ここにも大婦はいつでも一緒にという定型的判断が、事態を困難にしている点がある。介護の精神的側面は、介護を受ける側の人間性に応じて処方されるべきで、誰にも同一の処方で成功するわけではない。語り手が老夫婦の実態を適切にアセスメントできていたら、キヌを自死に追い込み、自分たちが心身共に疲れ果てることもなか

ったかもしれない。

また、『黄落』には、焼き場の収骨を待つ席で、親族の前で夫が落子に謝辞を述べなかつたとして、落子が夫に不満を募らせる場面がある。落子は実母の介護を子どもたちの共同責任と考えている（彼女が事実そうしている）。従って夫の老親の介護についても、すべての子どもの共同責任であるはずなのに、それを彼女が一手に引き受け、完璧にやり遂げた。この功績は、夫の謝辞によって明確に親族に認められるべきものだったのである。介護の功績が親族内とはいえ、本人や夫以外の人々に認知され評価されていくことが求められているわけである。こうした主張は、今後社会的拡がりを得ていくであろう。

つまり、誠意をこめて善意でなされる介護負担の心理的側面については、適切なアセスメントによる良好な人間関係や功績に対する十分な評価が必要である。介護が家族内に閉じこめられた、社会的に認知されない活動ではなく、社会的にも評価されるなら、担当者の苦勞も報われることになる。

また、上野も指摘するように、介護には専門家の援助も今後は当然考慮されるべきである。家族介護を神聖化することは、結果的に若年世代の負担を過大にするばかりでなく、介護を受ける立場の老人を親子関係のなかに取り込む結果になる。これは負担能力を超えた場合に世代間の軋轢を大きくし、老人に家族内への順応を余儀なくさせることになりがちであり、結果的に、老人から自然体で生きる自由を奪うことになりやすい。これらの点が改善されるなら、家族の介護負担は相当改善されるはずである。

しかし、それでもなお、終末介護が人生の最後における一種の負債と捉えられる限り、介護負担者にとつてそれは少ない方が望ましい。その意味では、キヌの潔癖な自死は賛美されつづけることになるのであろう。しかし、それでよいのであろうか。

#### 四 豊かな終末介護のために

『黄落』の語り手やその妻落子を安易に批判してはなるまい。白分が還暦を迎えた段階で老親介護に心身を消耗し尽くし、多くの初老の夫婦が家庭崩壊の危機にも直面しているのは、現代における重い現実である。落子の介護は献身的であり、語り手も相当以上に努力している。少なくとも彼の姿は有吉和子の『恍惚の人』における昭子の夫に比べると、大きな差がある<sup>(註四)</sup>。ましてや安岡章太郎がかつて『海辺の光景』に描いた息子像に比較するなら、隔世の感がある。

『海辺の光景』では、早発性痴呆を発症した母を精神病院に入院させた主人公が、自責の念を捨てきれずにいるのだが、それでも母の死を見届けた直後には、まず次のように考えている。

——九日間、そのあひだ一体、自分は何をしてゐたのだらう。

(中略)たとひ九日間でも、そのあひだ母親と同じ場所に住んでみることで、せめてもの償ひにするつもりだったのだらうか？ 償ひといふにはあまりにお手軽だとしても、しかし、それなら一体、何のための償ひなのだらう、何を償はうとしてゐたのだらう？ そもそも母親のために償ひをつけるといふ考へは馬鹿げたことではないか、息子はその母親の子供であるといふだけですでに充分償つてゐるのではないだらうか？ 母親はその息子を持つたことで償ひ、息子はその母親の子であることで償ふ。彼らの間だけですべてのことは片が付いてしまふ。外側のものからはとやかく云はれることは何もないではないか？

ここには自ら納得し、解放感を得ている主人公がいる。他人の容

喙を許さぬ居直りといってよい。互いにかけてがえのない存在である間柄の親子であつてみれば、その間に何があるかと、それは「彼らの間だけですべてのことは片が附いてしまふ」に違いない。しかし、このように居直つた直後に、彼は干潮で露出した海底の黒々とした朶に死の影をみて衝撃を受けている。それは次のように描かれている。

岬に抱かれ、ポツカリと童話風の島を浮べたその風景は、すでに見慣れたものだった。が、いま彼が足をとめたのは、波もない湖水よりもなだらかな海面に、幾百本もしれぬ朶が黒くると、見わたすかぎり眼の前いつばいに突き立つてゐたからだ。……一瞬、すべての風物は動きを止めた。頭上に照りかがやいてゐた日は黄色いまだらなシミを、あちこちになすりつけてゐるだけだった。風は落ちて、潮の香りは消え失せ、あらゆるものが、いま海底から浮び上つた異様な光景のまへに、一挙に干上つて見えた。齒を立てた櫛のやうな、墓標のやうな、朶の列をながめながら彼は、たしかに一つの“死”が自分の手の中に捉へられたのを見た。

この時代の精神病院の介護は不十分で、患者は悲惨な状態におかれていた。それだけに主人公が見たこの死の影も、強烈なものになつたのであろう。同時に主人公は、裏返された自己のエゴとここで直面しているわけである<sup>(注五)</sup>。これに比べるなら、『黄落』における介護は手厚く、著しい差がある。『海辺の光景』の母の死を黒い死というなら、『黄落』のキヌの死を、白い死といつてもよいほどである。

しかし、『海辺の光景』において母親の最後の九日間を病室で看取りながら、その死をこのように見据えていた主人公に比べると、

『黄落』において母親の自死を美化する語り手の心意に、筆者は一抹の不透明なものを感じる。老親とこれを介護する息子との関係は、「彼らの間だけですべてのことは片が附いて」いくしかないことではある。しかし、介護の過程で母が自死を選んだことを知りながら、そこに自責の情もなくこれを合理的に了解し、援助し、さらに美化している語り手には、エゴのために自己の精神的荒廃を隠蔽しているところがある。

語り手と露子の夫婦が最後までキヌの家族介護を貫いたことは「後光がさす」ほどの賞賛にも値しよう。キヌが自死の決意を見せた段階で、本人の意志を尊重し、延命器具に彼女を繋がなかつたことも、筆者には理解できる。しかし、その前に、その介護負担の重さに心からゆとりを奪われ、語り手や露子から終末介護を責められる豊かなものにしてしようとする発想が生まれる基盤が失われている。彼らにもう少しのゆとりがあつたら、キヌにマダラボケが始まつたとき、彼女はおそらく自分の死期の近いことを悟つたのであろうが、この時、介護者がすべき何かがあつたのではないかと。語り手にこの点への省察が欠けていることを、筆者は精神的荒廃というのである。しかも、母親の自死を美化している点には、自身の精神的証跡を隠蔽する詐術に近いものがある。

この点に関連して、我々は例えばエリザベス・キューブラー・ロスによつて提案された終末介護のあり方を知っている<sup>(注六)</sup>。もちろん、宗教観や臨死体験の解釈等で、彼女の提案を誰もが全面的に受け入れることには困難がある。しかし、ロスによつて示された多くの終末介護の事例に学ぶなら、キヌが自身の死期を悟つたことを察知したとき、語り手や露子が彼女のためにすべきだったことは、安易に手首を縛つて彼女から最後の希望を奪うことではなかつたはずである。その前に、彼女に残された時間においてしておきたいことを聞き出すことができたのではないか。少なくとも語り手には、母

のこれまでの我慢の人生において、彼女自身もそれと自覚していなかったであろうことばに、もっと耳を傾けることができたのではないか(注)。語り手の援助で彼女自身も明確には期待していなかったかもしれない心底の希望を見いだし、その実現を息子として共有できたなら、キヌにとつても生涯の生き甲斐とした子育ての成果の上に、その喜びを実感でき、その終末を飛躍的に豊かなものにできたのではないか。また、そうした援助ができたときは、その成果が語り手と露子の老後をも支える大きな力となったのではないか。

語り手は死を生涯の終わりという点からのみ捉えている。このために、心やさしい語り手が、母のために最後にしたことは、講演旅行の機会を利用して母の母校を訪ね、黄色に色づいた黄落の落葉を拾って土産とし、母に懐古の素材を提供することであった。彼は最後までお仕着せのやさしさでキヌを包んでいるのである。

キヌの死後にも、露子の実母の痴呆が始まった際、露子は週に一度の介護を担当し、そのおりに母から「わたしどうしたらいいの」と聞かれ、彼女はとっさに「何も考えないでいいのよ」と答えたという。露子はこれで良かったのかと自問しているが、語り手はこれにもただ感心し、賞賛している。

しかし、ここでもし、語り手がキヌの自死について深く省察していたなら、これを踏まえて夫として妻に母のし残したものを聞き出すことを勧め、母子でそれを成し遂げるように助言し援助することもできたのではないか。そこで母子の間に新たな希望と成就感を生み出すことができたなら、その努力は夫婦にとつても負債などではなかったはずである。ロスが提案する死の瞬間をもって生の完成とする視点には、確かに終末の人生を質的に転換する力がある。

このように考える筆者は、『黄落』の語り手と露子の夫婦に、キヌと同様の自死を迎えるような寂しいことを繰り返して欲しくないのである。

## 註

- 一、上野千鶴子『上野千鶴子が文学を社会学する』(朝日新聞社刊 二〇〇〇年一月)参照。
- 二、語り手がオムツを替えた時に見せたように、彼女は最後まで羞恥の感覚を失っていない。また、彼女が食事を断って自死を選択し、これを最後まで実行できた点からしても、彼女に高い精神力が残されていたことがわかる。
- 三、大町公は「(ボケ)る前に―佐江衆―『黄落』の提起したものの―(奈良大学紀要 第二十八号 二〇〇〇年三月)において山折哲雄の『お迎えのとき』(祥伝社 一九九四年)を引いて論じている。
- 四、有吉佐和子『純文学書き下ろし特別作品 恍惚の人』(新潮社 一九七八年六月刊)における昭子の夫は、大企業の次長の職にあるが、実父茂造の介護を妻に任せ、深夜妻が排尿の解除をしている姿を見ても、自分は布団に入ってしまった、「いつもすまん」と声をかけることしかできない。
- 五、拙著「日本近現代文学に見られる老醜とその克服」(「福祉文化」創刊号 二〇〇一年三月)参照。
- 六、エリザベス・ウブスター・ロス著『死の瞬間 死とその過程について』(『死の瞬間』と死後の生)『死、それは成長の最終段階』(鈴木晶訳 中公文庫)等参照。また、この中に取りあげられた臨死体験に対する解釈を批判的に検討したものに、立花隆著『臨死体験』上下(中公文庫)がある。
- 七、現在では、クリステイン・ボーデン著『私は誰になつていくの? アルツハイマー病者からみた世界』(桧垣陽子訳 クリエイツかもがわ 二〇〇三年一〇月刊)において、アルツハイマー病患者による内的意識の記録なども見ることができる。